

## 論文の内容の要旨

論文題目 近世日本思想における公共探求

氏名 高 熙卓

日本においては、朱子学が一般に受容された以降の時期、17世紀から19世紀半ばにかけて、従来の宗教的世界から踏み出して世の中に参加しさまざまなその運営を実践しようとする多くの言説が生み出された。本研究では、その試みを「公共探求」と呼び、とくに伊藤仁斎、荻生徂徠、石田梅岩、安藤昌益、本居宣長、二宮尊徳など各社会層から生み出された思想的言説を取り上げてこれにかんする分析を行った。そのなかで、これらの思想家たちのテキストを歴史的・社会的諸地平とのかかわりにおいて捉え、そこに見出された彼らの自他関係、その属した世界への参加、政治との関わり等をめぐる考え方を公共探求の視点から捉え直した。

本論文では、対象を分析するための、またそこから問題を掘り出すための方法概念として「公共」を使っている。それは、「全稱的なもの」としての「公」に与る成員はどんな外延と内包をもち、またどのように構成され、またその「公」がどのように成り立っているか、などの問題を捉え直すためのものである。それは、「公的なもの」が、より大きく広く外なる領域まで開かれ、しかも種々の差異をはらんだ主体の複数性を成り立たせるものとして登場する局面を捉えるためでもある。こうした方法概念を、歴史的に使われて来た「公」や「公共」、また現代用語での「公共性」、それらに関連する周囲の用語・言説のうちに投げ入れることで、そこにある問題性を浮き彫りにしようともした。

従来の丸山眞男の思想史研究や安丸良夫の民衆思想史研究は、日本近世思想における公共探求を問題にするにあたって、周知のように大きな示唆を与えるものであった。だが、またいくつかの課題を残すものでもあった。第一に、主体形成におけるコスモロジーの位相と役割に対する再定位の問題。第二に、官民対立論や変革主体論とは異なる、生活世界から立ち上がる公共的主体・社会形成の可能性の問題。第三に、その主体・社会形成論の思想的構造や回路の解明の問題などが課題として残されていた。

ところで、近世日本における政治的安定と経済社会化は、思想史においては、学問の一般的普及を起こした。そこでは、朱子学的構図の受容また変容を始めとして、公共をめぐる思想の運動が展開する。「上」の公的意識の高まりと、「下」からの主体形成や社会参加意識の高まりとが相まって、生活世界や各世界の現場に根ざしつつそれを公共的な世界へと変えようとする、多様な公共探求の試みが生み出された。そこでは、大きくいって、「自然」の再定位の一方で、「人為」的側面が浮き彫りにされ、それが倫理・政治・経済・文化などの世界における「生」と「倫理」との葛藤という問題にかかわっていた。こうした側面を具体的な対象に即して分析を行った。

第一部では、公共探求の二つの典型として伊藤仁斎と荻生徂徠を取り上げ、なかでも「自然」から「人為」への重心移動の意味を捉えながら、その可能性と問題性を捉え直した。

第一章では、伊藤仁斎（1627-1705）における、人や社会をふくむ世界全体を「活物」の「生」の世界として捉え、「情」の生活世界の内側から立ち上がる主体や社会形成論を中心に分析し、仁斎の「天下公共の道」は、生活世界の自然に根ざしつつ、テキストや「生々」の理念にもとづいたパーソナルな誠実・他者への寛容による自己形成を求めた。生活世界における共同性への居直りという問題を乗り越えて、そこからより広い他者に開かれる普遍性に向かう対話的・協働的公共探求であったことを明らかにした。

第二章では、「政治の発見」者として評価された荻生徂徠（1666-1725）を取りあげ、経済社会化が本格的に展開し、生活世界と経済との葛藤が生まれはじめた時代のなかで、徂徠における、「天」の「生」の理念と儒学的構図の再編にもとづいて、より非直接的・複雑な自他関係をも視野に入れた、全体の「生」の充実・育成をいっそう可能にする条件の形成を探求する側面を中心に分析した。そのなかで、徂徠の公共探求を、政治世界における私事化・独占化による民政の不在や政治組織の無力化の問題を乗り越えるために、「作為」論によって、民政の現場において公共の実現を可能にする幅広い政治主体・組織の形成と、それにもとづく政治・国家論を構想し（「作為」）、その国家による生活世界の再組織化を目指すものであったことを明らかにした。

第二部では、近世中期以後、経済社会化に伴う、経済と生活世界との葛藤の問題が本格化するにつれて、生活世界の各階層により密着した「下」からの公共探求が求められていくようになるが、仁斎や徂徠による思想史的インパクトの先に、彼らのような経学的関心から離れて、社会各層における主体・社会形成へと重心移動が起こった局面に焦点を合わせている。

第三章では、超越的「自然」を生活世界に奪回する形で公共的な主体形成論が構想された石田梅岩（1685-1744）における公共探求の側面を中心的に分析している。そこでは、それまでの経済活動やその担い手への軽視・外在的批判に対して、むしろ体制に巻き込まれながらも、他方では、その内側から、自分の拠点や観念性を確保しつつディシプリンを形成し、社会参加・形成していくことになるといった、いわば超越内在的視点によるダイナミズムを梅岩の「通俗道德」論から捉え直した。

第四章では、安藤昌益（1703-1762）における、徂徠的な「作為」のパースペクティブの反転から、階級や疎外の問題への解決として「自然」の生活様式を提示していた側面を中心的に分析している。それは、厳しい生存の危機に晒されていた農村の現実をふまえて、「直耕」する主体とその政治的自覚を示すものであった。昌益においても梅岩と同様に、超越的「自然」を生活世界に奪回する形で公共論が構想されていたが、そこでは、差別的秩序やその世界観さえ相対化し、「互性」的世界観にもとづく平等的かつ自立的な主体によるユートピア的な世界を構想する側面を持ちながら、他面では、感性的次元における土着主義に流れ、それ自体がかえって自らを絶対化する独断に陥る危険性といった昌益の公共論における両義性を捉え直した。

第三部では、近世後期に入り、さらに経済と生活世界との葛藤の問題がより危機的様相を帯びていくことによって、仁斎・徂徠が見出したものが新たな危機意識とともに再び展開されるとともに、それに相応しい新しい経世や物語の次元を構築することが要請されていた局面に焦点を合わせている。

第五章では、本居宣長（1730-1801）における、新しい経学ともいうべきものが、立ち上がってくる局面を中心的に分析した。宣長の国学は、儒学的な倫理学や政治学とは違った、生の実存的美学な感情から起こってきた文学的なもので、共同世界の再構築の側から公共探求の問題に接近するものであり、それが国学を——そして皇国の世界を基礎づけることになっていた。しかし、生活世界や秩序の動揺が浮き彫りになる状況のなかで、宣長の国学が、超越的な知やその地平（「徳」）を隠蔽しながら、単なるイデオロギー批判に止まり、結局は、神道的「自然」秩序としての「神為」世界が絶対化され、それが皇統中心の国家に収斂され、日本中心主義に変貌するものであったことを明らかにした。

第六章では、二宮尊徳（1787-1856）における、自然のままでは成り立たない、人為領域としての経済自活の構想と方法論の探求を中心的に分析した。彼の公共探求は、強い自立精神とともに他者と超越者に開かれた連帯意識にもとづいて、危機的局面に晒されていた農村・各藩などにおいて講、組合などのプラン、具体化・制度化・習慣化を通じた立て直しによって、循環性を含んだ持続可能な流れ——いわば持続可能な開発（Sustainable Development）を構想するエコロジー・エコノミックスと類比できるものを——自然とは別次元に人為によってつくることによって、自他共生を図ろうとしたものとして捉え直した。

このような日本近世思想における公共探求は、総じて振り返ってみると、自他の「生」

への共鳴・育成・対話にもとづきつつ、自他の共生を可能にする空間の構築につながるものをもっていた。それは、人為性を担保するところから始まっているが（仁斎・徂徠）、他方、これに見合ったコスモロジーおよび超越者・全体者なども改めて浮上してきている。そこでは、一方では、自然や他者・全体の生への没入に回帰する傾向が見られるが、他方では、自然や他者に関わられつつ、公共的な実践をどこまでも探求的に維持しようとするものも見出されていた。

今日のわれわれには、自然や自己・他者を(国家や全体性と切り離して)再定位しつつ、自・他共生の公共空間の形成をはかることが課題として残されている。その際、日本近世思想における公共探求は、これまで公私関係をめぐるさまざまな癒着や欺瞞を反省するためにも、自他協働的な主体・社会の形成のためにも、肯定・否定いずれもふくむ、多面的な可能性を示唆するものであると考えられる。